

フスト・マイスターとグーテンベルク聖書

—装飾から読み解く画家とマインツ印刷所との関わり—

池田真弓（日本学術振興会特別研究員）

1455年頃、マインツのヨハン・グーテンベルクはヨーロッパ初の本格的な活版印刷本として、大型聖書を印行した。グーテンベルク聖書として知られるこの本は、現在48部が本の形態を保った状態で残されているが、この現存コピーのうち、ニューヨークのピアポント・モーガン図書館とスペインのブルゴス公立図書館にそれぞれ所蔵されている2部が、フスト・マイスターと呼ばれる逸名画家により装飾されている。これら2部は、聖書各書とそのプロローグの冒頭が流麗な装飾イニシャルで飾られており、残されたグーテンベルク聖書の中でもとりわけ豪華な部類に入る。この2部の装飾に関しては、エバーハルト・ケーニヒの1980年代前後におけるマインツ印刷本の装飾に関する一連の研究で触れられているが、同氏は、両本の装飾のデザインが非常に似通っていることを指摘し、これら2部の密接な関わりを示唆している。さらにケーニヒは、両本はフスト・マイスターがグーテンベルクの印刷所から依頼を受けて装飾を施したものと推測する。つまり同氏の説によるならば、この逸名画家はヨーロッパ初の活版印刷所に雇われ仕事をしたということになる。しかしケーニヒの研究は、綿密な調査に基づいているとはいえず、問題点も少なからず見受けられる。

そこで本発表では、モーガン・ブルゴス両本の装飾と、それに伴う朱書きを綿密に比較し、これまで具体的には示されてこなかった両本の装飾の密接な繋がりを明らかにすると共に、これまでの説に反し、これら2部が、グーテンベルクの印刷所ではなく、同じくマインツで運営していたヨハン・フストとペーター・シェーファーの印刷所（以下フスト・シェーファー印刷所とする）の依頼によって装飾されたことを示す。実は両者は、元はグーテンベルクの印刷事業の協力者であった。またフスト・マイスターは、同印刷所に雇われて何冊もの印刷本を装飾しており、この2部のグーテンベルク聖書も、この印刷所の元で装飾された可能性が考えられる。発表ではまず、モーガン・ブルゴス両本がどのように関係付けられるのかを確認する。具体的には、モーガン本の装飾の質とデザインの細かな差異から、モーガン本が先に装飾され、それを手本にしてブルゴス本が装飾されたと推測できること、モーガン・ブルゴス両本とも、フスト・マイスターと朱書きを担当した人物が同時進行的に（場合によっては一つ屋根の下で）仕事を進めていったことなどについて論ずる。続いて、この2部で用いられた朱書きのテキストが、フスト・シェーファー印刷所の用意したものであることを示し、そこから、フスト・マイスターと朱書きの担当者が共に、同印刷所の指示の元に作業を行っていた可能性が高いことを指摘する。

インキュナブラ（初期活版印刷本）の研究では、近年、装飾画家の出版業における役割の重要性が認識されるようになったが、本研究は、初期活版印刷業者と装飾画家の具体的な関係を提示した数少ない研究例の一つである。同時に、当時の装飾画家が、活版印刷本にどのように活動の場を見出していったのかを知る一つの手がかりになるものとする。